平成21年度購入資料の紹介

―日本の陶磁器―

平成21年度、当館は昨年に引き続いて日本陶磁器の蒐集を続けた。日本国内での系統的編年的消長を代表するものや技法的特徴に優れたもの、特に鹿背山焼や湊焼など地方窯を中心に蒐集した。

手焙（江戸中期　高12.6cm　径24.2cm）

上田宗品作の手焙である。上田宗品（生年不詳～1769）は、奈良風炉師で、風炉や釜、手焙、火入、灰器などを京都府相楽郡木津に窯を構えて生産した。その器表に奈良赤膚焼初期の特徴がよく表れている。

麻浸し（舌出し）（江戸後期　高7.8cm　径10.4cm　長24.5cm）

舌部裏面

「麻浸し」または「舌出し」と呼ばれる器である。突出する舌部裏面に「御土器師」「春日社」「浅田九兵衛」と線刻がある。本例のように春日社や御土器師の銘があるものがあるが、春日神器ではない。奈良近郊の農村で「奈良さらし」を作る時の道具で、麻の繊維に撚りをかけて糸にするとき、繊維を水に浸すために使われたものであるという。茶道界では、灰器や花生け、盃洗いとして珍重されることがあり、水漏れ防止のため内面に赤漆塗りが施されたと思われる。

男山焼染付水注（江戸末期　高13.6cm　径14.4cm　長22.5cm）

和歌山県有田の男山焼で、伊万里風染付水注である。注ぎ口や取手、器形に歪が大きい。男山焼は、江戸末期に紀州藩の保護のもと伊万里焼に倣って生産されたが、明治初期には衰退する。「仙馬」の銘があり、光川亭仙馬（土屋政吉：1814-87）の作であることがわかる。

鹿背山焼南京赤絵香炉（江戸末期　高7.8cm　径7.3cm）

京都府相楽郡木津の鹿背山焼の南京赤絵香炉である。鹿背山焼は、文政年間に始まり明治期まで存続し、染付、「祥瑞写し」に特徴があった。この香炉も、口縁帯に「玉堂佳」と３字を記し、四賢者と松樹を描いている。

銹絵姥餅皿（江戸末期　高1.6cm　径15.9cm）

滋賀県草津の名物「姥餅」販売のための什器、銹絵姥餅皿10枚組である。表に芭蕉がこの餅を詠んだ句「千代の春　契るや尉と姥が餅」を記している。本来店頭で用いられたが、次第に茶器としても用いられた。

湊焼茶碗（江戸末期　高7.3cm　径11.5cm）

大阪府堺市湊にあった湊焼茶碗である。「吉右衛門」の陶印がある。赤褐色の発色が美しい軟陶である。

楽焼灰器（江戸後期　高7.8cm　径17.5cm　長18.8cm）

楽焼灰器で、「久楽」の陶印がある。初代久楽が千家に出入りして楽焼を始め、二代弥助が紀州偕楽園焼に招かれて、紀州藩主から「久楽」の印を授けられたことにより、和歌山で焼れた楽焼には「久楽焼」の名がある。

川名焼銅版染付火入一対（江戸末期　高9.5cm　径10.5cm）

愛知県名古屋市昭和区にあった川名焼の銅版染付火入一対である。染付磁器で、大量生産のため銅版転写による文様を特徴としていたが、明治20年頃に生産されなくなった。

紀州瑞芝焼染付盃（江戸末期～明治初期　高3.7cm　径8.5cm）

紀州偕楽園近くの瑞芝焼窯で制作された染付盃である。口縁に金漆による補修がある。

（山口）